



## ドイツにおける石原莞爾（その三）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-08-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 嘉啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00006187">https://doi.org/10.24729/00006187</a>

# ドイツにおける石原莞爾（その三）

伊 藤 嘉 啓

## 一 旧蔵書

平成九年三月、石原莞爾の資料を求めて、酒田市と鶴岡市を訪ねた。石原旧蔵書と石原の家族への手紙を有する光丘文庫は、酒田市立中央図書館の分館である。『石原莞爾旧蔵書目録』によれば、蔵書数は、洋書一二九冊、和書一〇〇六点とあるが、その蔵書には鮮明な特徴が指摘できる。第一に、軍事関係書の多さである。それは洋書三二五点、和書二〇七点、合計五三二点、全体の約三分の一にあたる。これにナポレオン、フリードリヒ大王の伝記類を加へると、それで約四分の三を占める。特徴の第二は、宗教関係書の少なさである。石原と云へば、熱烈な日蓮信者として有名であり、事実、漢口からの、そしてベルリンからの妻への手紙を読むと、信仰に關することが、突出して多く書かれてゐる。石原にとって、宗教は生半可なものではなかった。有名な「最終戦論」の構想において、石原に最終的な確信を与へたのは、日蓮の言葉であつた。それなのに、この蔵書では、宗教書は、洋書三点、和書八点、併せて十一点にすぎず、そのうち日蓮に關するものは、山川智応『日蓮聖人と百王思想』とSatomi(里見)「Ein neues Licht aus Osten, der Nitschirenismus」(K. Franke 訳)の二冊しかない。

これはどう考へる可きか。散逸も、もちろん、考慮に入れなくてはならないが、石原は何よりも先づ、軍人であり、作戦参謀であつたことを、この蔵書は歴々と示してゐる。しかし、同時にこの蔵書は、所有者が軍人であつたことを一瞬疑はせる。通常、軍人がこれ程多量の本を、しかも、これ程多くの外国語の本を持つのは異例だからである。また、石原は著書が多く、出版されたものは十九点に及ぶ。軍人と云へば、『本庄繁日記』のやうな日記類とか、回想録くらゐが普通であらう。チャーチルは『第二次世界大戦回顧録』を書き、政治家ばかりでなく、文筆家チャーチルの名もあげたが、石原もまた、「読書する軍人」(山口昌男『挫折』の昭和史)、岩波書店)であつた。

石原が生まれたのは、酒田の隣の鶴岡市である。生家はもはやなく、そこはいま医院になつてゐる。しかし、石原が昭和十七年九月から二十一年一月まで住んでゐた家は現在もそのまゝ残つてゐる。当時、石原と同じ隣組で、面識のあつた人の話では、「石原さんは田舎親父のやうだつたが、奥さんは中々のハイカラで、よくシナ服を着てゐましたよ」とのこと。夫人のシナ服は、石原が情熱を注いだ東亜聯盟の現れか。『虹色のトロッキー』(安彦良和著、潮出版社)の中では、満州事変を起しておきながら、ジュネーヴの國際聯盟の會議に、「ぬけぬけと支那服を着」て行つた「石原の図太さ」が指摘されてゐるが(第

一集、一三三頁)、石原が時々シナ服を着たのは、中国に対する親しみからではなかったのか。

## 二 関東大震災

ベルリンにおける石原の話に戻る。大正十二年(一九一三年)九月である。

新聞ニテ横浜、東京、大地震ノ事ヲ知り、直チニ里見先生ニ通知ス。驚ク外ナシ。御無事ナリヤ。安政以来ノ大地震ナルベシ。電報簡ニシテヨク知ルヲ得ザルモ、独乙ノ地震計迄感応アリシ由也。(九月二日)

関東大震災は九月一日の午前に起つた。同じ時期に、ミュンヘンに留学してゐた斎藤茂吉は、九月三日の夕刊ではじめて日本の地震を知つたと云つてゐる(随筆「日本大地震」、歌集「遍歴」)。いま当時の新聞を調べて見ても(Berliner Tageblatt und Handels Zeitung)‘二日には当該の記事はなく、矢張り三日の夕刊にはじめて、「日本に大地震」と出てゐる。石原がいかなる新聞で読んだかは不明。とにかく情報入手は早かつた。

関東大震災について、まづ右のやうに書いた後、石原は更に言葉をつづけるが、それは家族、親戚、知人などの安否を尋ねる個人的なものではない。まさに、石原ならではの発言であつた。

日本モイヨイヨ覚醒スベキ秋、到来セリト見ル。無意味ノ、天変

地妖トノミ見ル能ハザルベシ。世界統一。一閭浮提未曾有ノ大闘諍。本門戒壇ノ建立。時期ハ日ニ切迫シツツアルコト各方面ヨリ見テ明也。(九月二日)

これは、日蓮の「撰時抄」にもとづいてゐる。日蓮は云ふ、「其の時天変地妖」盛んになり、「前代未聞の大闘諍一閭浮提に起るべし」と。震災を契機に、以下、しばらくは日蓮の予言を踏へた記述が手紙に充滿する。

不幸、最大ノ不幸。然シセメテ此禍ヲ転ジテ福トナシタキモノ也。日本モイヨイヨ日本固有ノ精神ニ帰ルベキ秋来レル天ノ御示シニアラズヤ。政治、産業、外交、其他文化的事業、凡テ獣的ナル西洋ノマネハモウ止ムベキ時也。「・・・」人迷ツテ天イカル。真ニ畏ルベシ。慎ムベシ。(九月三日)

我等ハ深キ悲シミノ中ニモヨク天意ノアル所ヲ体シ、法ノ為、國ノ為真ニ一命ヲ捧グベキ秋ハ来レル也。[・・・]

嗚呼、我等本化ノ徒ハ、イヨイヨ自己一身ヲ省ムベカラザルコトヲ銘心セザルベカラズ。凡テハ法ノ為也。凡テハ國ノ為也。凡テハ此不安ノ極ニサマヨフ世界人類ノ為也。凡テヲ捧ゲン、凡テヲ捨テン。以テ本化ノ弟子タルノ本分ヲ完ウセンノミ。

南無妙法蓮華經 (九月四日)

余ハ日本ガ戒壇ノ国タルヲ確信ス。余ハ本化ノ明教ヲ信ズ。[・・・]吾等ハ凡テニ打チ克チ、必ズ戒壇成就ノ日ヲ実顯セザルベカラズ。

此度ノ大變亦天意ノアル所アラシ。落胆スベカラズ。悲觀スベカラズ。此大禍ヲ軋ジテ大福トスベキ也。

南無妙法蓮華經 (九月五日)

石原にとつて、もはや、身内は二の次である。何といつても、「法」のため、「國」のためである。それは次の手紙が明らかにしてゐる。

実ヲ申セバ家ノ事等ハ已ニ一時小問題トナリ、國家ノ前途ヲ思フテ数夜泣キ明シタルナリキ。

而モ此事ニ於テ吾ヲ慰ムルハ唯吾人ノ信仰ノミ。(九月六日)

これはどう取ればいゝのか。まづ、石原において、信仰が占める比率の大きさである。同じくドイツで関東大震災の報に接した斎藤茂吉は、隨筆「日本大地震」で、その時の心境を書いてをり、そこには、宗教にも少しは触れてはゐるが、全体には家族や友人の安否を氣遣ふ記述ばかりで、石原のやうな発言は、ない。一つ見落としてはならぬ点がある。石原の場合、宗教は國家と強く結びついてゐるのである。こゝでの宗教は、個人の悩みに応へるのではない。あるいは、より少なくしか応へない。さうではなく、宗教は、より多く國家の指針なのである。石原が日蓮に惹かれた原点は、まさにこゝにこそある。日蓮のもつ政治性、そのために、日蓮は迫害を受け、そのために、石原を虜とした。

しかし、日蓮を信仰した石原が、その理由で、特異と見られるならば、それは間違ひである。この頃、大勢の人が日蓮主義へ走つた。高山樗牛(明治四年―明治三十五年)が日蓮主義を標榜したことは、よ

く知られてゐるが、樗牛は石原と同じ鶴岡の出身である。石原の蔵書の中には、樗牛全集が入つてゐる。また矢張り同郷の先輩・佐藤鉄太郎中将(慶応元年―昭和十七年)も熱烈な日蓮信者である。佐藤の著書『帝國国防史論』を、石原は批判しながらも、高く評価してゐる(『戦争史大観の序』)。現在、石原旧蔵書の中に、この本は見当たらないが、その節略本の『帝國国防史論抄』は入つてをり、いくつかの鉛筆の書き込みまである。これら先輩と並んで、石原と同世代の人では、宮沢賢治(明治二十九年―昭和八年)が日蓮信者であるばかりでなく、石原と宮沢賢治は、どちらも國社會の會員であつたから、二人は同じ會場で、田中智學の講演を聞いた可能性がないでもない。日蓮がこれほど人々の関心を集めたのは、おそらく、時代の要求であつたであらう。

この日の手紙は、さらにつゞき、「天此人ニ重任ヲ与ヘントスルヤ先其身ヲ窮乏ス」と孟子を引用するが、記憶によつたらしく、少し間違つてゐる。正しくは、「天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身、行私亂其所爲」(孟子、告子・下)である。もつとも、古典を引用する場合、一字一句そのまゝでなく、我流に幾らか変へる方が氣が利いてゐる。森鷗外の『独逸日記』でも、さうなつてゐるが、こゝは、そこまで計算しての引用ではあるまい。それは、とにかく、孟子を踏へて、今度の天災は、天が日本に与へた試煉であり、それに耐へて、戒壇國であるところの日本が、道義的に世界を統一すべきといふ確信を述べる。そして、地震による災害から、いかにして立ち上がるか。

百億、千億、此ノ如キ物質的損失ハ決シテ嘆クベキニアラズ。恐

ルベキニアラズ。今ヤ正シク又立憲養正会政策ノ命ズル所ニ添ツテ、新シキ国家行政、経済、組織ヲ完成シ、国民ノ全力ヲ統一シテ之ガ復旧ヲ計ルベキ也。

と、書き、つゞけて、こゝでも、資本家への強い反発を示してゐる。

資本家共ノ任意的活動ニ放任スルガ如キ、断ジテ不可。

そして、具体的な復旧対策の一つの例が、また突飛である。

要スレバ陸軍ノ如キ十分ノ一ニ減ズベシ。余ノ如キ直チニ職ヲ捨テテ土方人夫トナラン。真ニ一身ヲ君国ニ捧グベキ秋ハ切迫シツツアリ。(九月六日)

### 三 最終戦論

日本の地震は、ドイツの新聞にも大きく報じられたから、ドイツ人は日本人と見れば、何かと慰めてくれた。

「カッフエー」ノ主人大ニ氣ノ毒ガリテ、色々慰問的ノコトヲイフ。小生大ニ興奮シ下手ノ独乙語ヲ以テ、日本ノ真使命ヲトク。

正ニ舌端火ヲハクノ慨アリ、少々溜飲ヲ下グ。(九月六日)

石原はドイツ語が下手だったと云はれてゐる。会話は出来ず、読み書きも、うまく行かなかつたと云ふのである。この評価は、おそらくは、

里見岸雄の回想記(「柏林時代の石原莞爾」)あたりに由来してゐるであらう。これが種本となつて、諸書に引用されたのだと思はれる。ピーティ(M. R. Peattie)も、「彼は陸軍士官学校でドイツ語を学んだが、すらすらと読書や会話ができなかった」(訳書、四一頁)と云つてゐる。ピーティの『日米対決』と石原莞爾は類書の中では、客観的で割合によく纏つてゐるが、個々の事実の解釈は平凡で、新味に乏しい。石原のドイツ語に対する判断も、その一つである。読んだ資料を盲信してゐる。たしかに、石原自身が、自分はドイツ語が下手だと手紙に何度も書いてゐる。しかし、石原はあれだけ多量のドイツ書を所有し、それもとど飾つてゐただけではなく、そのうちの何冊かは明らかに精読して、自分の著書に利用してゐるし、ベルリン時代の手紙を読めば、会話もかなり自由であつたことが分かる。「正ニ舌端火ヲハク」とは、ドイツ語が機関銃の弾のやうに飛び出したのであらうか。

地震の被害は、外国には最初、過大に伝つた。四日朝刊には、「地震の被害者二十万人以上」、同日夕刊には、「東京は今尚、炎上中」(Berliner Tageblatt und Handels Zeitung)と書いてある。石原は、何と一時は、死者三百万と思つたが(九月五日の手紙、死者数はゼロを一つ多く読み違へたのかもしれない)、その後、だん／＼、情報が入るに従つて、被害は当初の報道ほどでないことが分つて来た。(実は、死者・行方不明者の総数は、十三万人。)それにしても、甚大な被害には違ひない。

此度ノ大地震果シテ何ノ兆ゾヤ。小生静カニ考ヘテドウモ、一人ヒソカニ想像ヲ逞シウスルコトアリ。[・・・]

此度ノ地震ハ地涌ノ大菩薩、再ビ世ニ出現シ給フベキ兆ナリ、其

御出現ノ地ハ東京。

換言スレバ、本門戒壇建立、世界大戦争（真ノ意味ニ於ル）ハイ  
ヨイヨ二三十年後ニ切迫シタルヲ示ス。

南無妙法蓮華經

天皇陛下万万歳

謹デ東宮殿下ノ御慶事ヲ慶讃シ奉ル

可秘可秘 （九月十四日）

こゝは、後に有名になる「最終戦争」の発想の萌芽であると思なされ、そのために諸書に引用される箇所である。たゞし、「最終戦争」構築において、震災にもとづく仏教的予言のみを過大に評価することは、注意しなくてはならない。石原を教祖化してゐる、石原崇拝グループには、石原の「予言」を宣伝する傾向がある。それは、石原像を歪めはしても、石原理解のプラスにはならない。「最終戦争」はあくまでも戦史を研究し、それに現状の経済、科学技術をも考へ合せた結果の理論的な労作なのである。宗教的予言と混同してはならない。一体、『世界最終戦争』と題する本は、一般読者向けのものであつて、『戦争史大観』こそ、石原の理論的著作の代表である。前者では、「仏教の予言」といふ章があるが、後者には、もと／＼は、仏教への言及はほとんどなく、理論に終始してゐる。「もと／＼」とは、昭和十六年一月から二月にかけて執筆された本文をさしてゐる。しかし、出版の時には、「戦争史大観の序説」なる文章が附載され、そこには、日蓮の言葉、「前代未聞の大闘争一閻浮提に起るべし」が出て来るが、それは論旨を形作るものではなく、著者の信条告白に過ぎない。「戦争史大観の説明」と題された本文は、石原自身が「研究」と云つてをり、

あくまでも理論的である。（軍事学の、より専門的研究としては、御進講の案がある。）旧蔵書を見ても、戦史・戦略関係の本が、その中心であつたことは、動かない事実である。たゞし、以上の見解は、石原の宗教的側面を、より軽く見ようとするものではない。宗教人としての石原は、また別に大いに考慮されるべきである。

手紙（九月十四日）では、まだ自分ながら、あまりにも奇抜な考へと思つたのであらうか、他言しないやうに（可秘可秘）と云ひ、たゞ「夫婦ハ一体ナルヲ以テ、鐙子君ニハ内シヨデイフナリ」（同日）と書いてゐる。夫婦が一体といふのは、石原の信仰の上からの信念であり、妻へのお世辞ではない。そのために、毎日のやうに妻へ手紙を書き、その日の出来事を細々と知らせるのは、遠くはなれてゐても、二人は日常を共有しようとしてゐる、あるいは、共有しなければならぬのである。

#### 四 慰める人

外国生活には、それなりの苦勞が付き纏ふ。外国へ行き、日本人同士で将棋ばかりして帰つた人もゐるらしいが、「留学」を真面目に取れば取るほど、悩む場合も多い。夏目漱石は律義な性格から、留学をあまりにも真剣に考へ、神経衰弱に陥り、一時、発狂といふ噂さへ流れた。石原の仲間にも、ドイツで悩んでゐる者がゐた。

一友人少々頭ヲ痛メ不眠症ノ氣味アリ。夜ウナサル由ナルヲ以テ終日慰メメテヤル。大ニ沈靜セルガ如シ。（九月十九日）

強い人間だけが、他人を慰め得る。ドイツからの手紙で、石原は一言の愚痴も漏らしてゐない。鵬外は満州に出征した折り、苛酷な条件の中で生活した。台所で調理したスープは、運んで来るうちに煮凝りになる。部屋の中は、それほど寒い。夜は南京虫を避けるために、簾箆を引っ繰り返して、その上に寝る。一晩中、寝返りは出来ない。おまけに、赤痢にまで罹った。それでも、鵬外は、明るくことばかりを書いて、小さい子供を抱へて留守を守つてゐる妻を慰めてゐる。鵬外の精神的強靱さには、驚くばかりであるが、石原もまた、そんなに負けてはゐない。石原のこの強さは、どこから来てゐるか。十月二十九日には「真ニ自己ノ責務ヲ痛感シ、一身ヲ捧ゲテ努力スルモノニハ如何ニ淋シキ時ト雖必ズヤ無限ノ慰安アル訳也」と書いてゐる。

この頃のドイツは、敗戦後の社会不安と猛烈なインフレに苦しんでゐた。石原はそこに、戦争に負けることの悲惨さを目の当たりにした。当時、ドイツには大勢の日本人が留学してゐたが、石原は誰よりも強く敗戦の惨めさを実感したやうに思はれる。

一体当地ニ居ル日本人ハ直チニ独乙人ノ悪口ヲイヒタガル也。勿論今日独乙人ハ、乞食ト泥棒ノ集マリ也、食ヘナイ為メニ。然シ此ノ如クナレル原因ヲ考ヘル時ハ、一掬ノ涙アツテ然ルベキナリ。若シ日本ヲシテ此ノ如キ境遇ニ置カシメバ、日本民族、一升三十五銭ニテ米暴動ヲ敢行セル日本民族ハ、果シテ独乙人丈ケノ沈静ト自重モナシ得ルナランカ？ 大ナル疑問ナリ。（九月二十日）

さらに、この手紙はつゞく。

世界大戦ハ其責独乙ニアリトカ、否英国ニアリトカ、徒ニ議論スルモ愚也。凡テニ責アリ。日本ニモ責ハアル也。人類共通ノ責ナリ。

昭和二十年十月、敗戦後の日本において、石原は、我国が負けたのは、「いわゆる指導者だけの責任ではない。国民は常に自己に相応しき指導者を与えられるものである。国の興亡は匹夫も責あり」（『新日本の建設』、選集7―1九八、九頁）と云つてゐるが、二十年を隔て、主張は同じである。

われ／＼は、ドイツ人、あるいは西洋人を非難するばかりではない、と石原は考へてゐた。

我等ハ毛唐ノ動物的ナル、原始的道義心ヲイヤシム。然シ徒ニ之ヲ憎ムベキニアラズ。「・・・」徒ニ憎ミテ悪口スル丈ケニテハ、彼等ヲ導クノ資格ナシ。（九月二十日）

石原は西洋人を罵詈雑言してゐるやうな所もあるが、単純な排外主義者、あるいは国粹主義者ではない。むしろ、西欧文明の伝統を熟知し、その高さを認識してゐた日本人の一人であつたであらう。後年になるが、「西洋人も道義を軽視しない」（『戦争史大観』、選集3―二六六頁）とも云つてゐるし、日本人の道義心の低下をなげいてゐる所もある（『戦争史大観』、選集3―二六二、二頁）。

九月二十一日、「天候急ニ変ジ中々寒クナレリ」とあるが、通常、ドイツでは、この頃から暖房が入る。しかし、敗戦の傷痕はいまだ癒えず、一般に物が払底してゐたから、暖房はまだ／＼先になる。

イヨイヨ今日ヨリ伯林市内ハ暖房ヲ許可セラレシナルモ、小生ノ家ハ貧乏ノ為実行セズ。止ムナクインバネスヲ被リテ読書ス。  
(十月十五日)

今日ヨリ暖房ノタメノ蒸氣来ル。然シホンノ御シルシ丈ケニテ室全部暖クナルニ至ラス。マルク暴落、失業益々多ク、流石ノ独乙人モイヨイヨ閉口ノ体也。(十一月四日)

ドイツは寒い。特に、ベルリンは寒いので有名である。それなのに、不十分な暖房。この年は、幸ひ、暖かな冬だったらしいが、それにしても寒かったと思ふのに、

当地中々寒クナレリ。雪ハ街道上ニ少シク積リアリ。日中ト雖モ少シモ解ケルコトナシ。室内モ石炭欠乏ノ為メ、十分暖カナラズ。但小生ハ到着後大奮発ニテ毛皮ノ外套ヲ求メシ為、少シモ寒シト感ジタルコトナシ。御安心アレ。身体ノ具合モ頗ルヨロシ。

(十二月二十六日)

と、至つて元気である。毛皮の外套は、出来合ひではなく、注文の品で、かなりの高級品であつた(十月九日)。

甘糟正彦が、地震の混乱の中で何かやらしたらしいと、石原が知つたのは、九月二十三日であつた。「甘糟ハ中々ノ人物、兎ニ角思ヒ切ツテ仕事ヲアル人間」(九月二十三日)と、先づ甘糟の人物を評し、数日後、事件の内容を知つて、「甘糟大尉ハ大杉栄等ヲ、死ニ至ラシ

メシモノナリトノ事ヲ耳ニス」と書き、その後に大杉評価の言葉を記してゐる。

大杉栄ハ目下日本ニ於ケル偉大ナル人物ノ一人ト思フ小生ハ、彼ヲ殺スコトニ同意シ難キモ、然シ口ニ憤慨シナガラ実行ノ意氣ナキ者共ノ集合シアル今日、甘糟ノ行為ハ讃嘆ニ価ス。元來人殺シハ食フニ困ル人間ノナスコト也。主義ノ為、衣食足ル人間ガナス場合ハ誠ニ少シ。「・・・」我日蓮門下ニ大杉一派丈ケノ信アルモノ幾人アリヤ、甘糟氏位ノ信アル人幾人アリヤ。(十月三日)

云ふまでもなく、大杉栄(明治十八年―大正十二年)はアナキスト。前年の大正十一年、万国無政府主義者大会に出席のため渡仏、アジ演説をして、フランスから国外追放されたばかりであつた。甘糟正彦(明治二十四年―昭和二十年)は憲兵大尉である。甘糟は信念の男、大杉は偉大な人物といふのが、石原の寸評であるが、それにしても、この右と左の二人を、どちらも許容するあたり、石原の度量を示してゐる。もつとも、後に甘糟は満州で東条英機の手先となり、石原主導の東亜聯盟の会員を締め出すのだが。

石原が骨折つてゐた、里見岸雄の著書の独訳が出来たのを祝つて、小旅行の計画が持ち上つた。行き先は、ベルリンの市街を流れるシュプレー川の上流(東南方向)、水郷地帯のシュプレーワルト(Spreewald)、十月五日早朝に出発したが、地下鉄のストライキとぶつかり、おまけに雨まで降つて来た。しかし、間もなく寒くなるので、旅行を延期するわけにも行かず、決行となつた。やつとタクシーを捕へて、駅に辿りついたが、法外のタクシー代に驚かされたものゝ、二時間汽車を走らせて目的地に着いた頃には、雨はあがり、陽まで差してゐた。



こゝは運河が縦横に巡らされてゐる。「輕快ナル小型ノ舟ニ椅子ヲナラベ、数名ノ男女、例ノマンドリンニ合セテ歌ヒナガラ棹サス風情ハ余リアシキモノニアラズ」(十月六日)と書いてゐる。「風情は、すこぶるよし」とは云はず、「余リアシキモノニアラズ」と持つて廻つた表現をしてゐるのは、少し負け惜しみが感じられる。翌日も舟を浮べて遊び廻る予定であつたが、朝から雨。早々に午前十一時の汽車でベリンに戻つた。

## 五 戦史の研究

石原のドイツ留学の目的は、戦史・戦略の研究である。石原はこれまでも、方々の戦地跡を見学し、参考文献の渉獵に努めて来たが、こゝで云はゞ「家庭教師」について、個人授業を受けることになった。同僚北野大尉の下宿の女主人が、なか／＼の交際家で、何人かの将校を知つてをり、その一人、オットー中佐(参謀)を紹介して貰つた。受講生は、石原と北野大尉で、週二回づつ話を聞くといふ契約である。

午後六時ヨリ一時間半、初メテ独乙参謀中佐ノ講話ヲ聞ク、大シテ頭ノヨササウナ人間ニアラズ。時々此方カラヤリ込メテヤツタリシテ、面白ク時間ヲ過ス。兎ニ角日本デイヘバ、参謀本部ノ戦史課トイフベキ所ニ目下勤務シテ居ル人間ナルヲ以テ、戦史ノ材料等ヲ相当ニ知ツテ居ルラシク、少シハ役ニ立ツコトナランカ。

(十月八日)

この「授業」は、第一回目が十月八日の月曜日、第二回目は十二日

金曜日と、以下、約束通り、月、金の週二回規則的に行はれた。「授業」の様子は、第一回目についての手紙からも分かるやうに、石原が質問で先生をやり込め、楽しんだ授業だつたやうである。これからも、石原はドイツ語会話が、かなり堪能だつたと推測される。

今夜ハ例ノ独乙参謀中佐ノ話アリ。散々問ヒ詰メテ苦シメテヤレリ。先生頭ノ悪イコト甚シク閉口ノ体也。然シ相当参考トスルコトヲ得テ甚タ便利也。(十月十九日)

これは第四回目についての報告である。何のかのと云ひながらも、参考にはなつたのである。

例ノ参謀中佐ノ日也。先生ノ不勉強ト頭ノ悪サニハ少々愛想ヲツカシタリ。今日ハ散々問詰メテヤル。先生油汗ヲ流シテ奮戦セルハ、氣ノ毒ナリキ。(十月二十六日)

例ニヨリ参謀中佐ノ講義ヲ聞ク。益々彼ノ低脳兒タルヲ知ル。然シ今日ハ彼モ大分下準備ヲナシ来レリ。(十月二十九日)

講義はこのやうな調子で進んだのだが、それらを次のやうに総括してゐる。

友人ノ宿ノ主人ノ紹介ニヨリ始メタルモノナルガ、此男、其主人ニ向ヒ「ドウモ日本人ノ質問ハ中々手厳シク、驚クベキ觀察力アリテ我等ノ及ブ所ニアラズ」トシキリニ繰リ返セリトカ、必ズシ

モ御世辞ニアラス。我等ハ確カニ彼ニ比シ、数倍ヨキ頭ヲ所持シ居ル也。(十月二十九日)

石原がこのドイツ人参謀をどんな風に苦しめたかは、その大要が分る。第一次世界大戦におけるドイツの作戦について、石原は次のやうな質問をした。

戦史課のオットー中佐の講義を聴く事にした。「・・・」ある日シュリーフェンは和蘭の中立を犯す決心であつたろうと問うたところ、何故かと謂うから色々理由を述べ、特に戦史課長フェルスター中佐の著書等にシュリーフェンがアントワープ、ナムールの隘路を頻りに苦慮するが、それより前にリエージュ、ナムールの大隘路があるではないか、それを問題にしないのは和蘭の中立侵犯の証拠であると詰り、フェルスター課長に聞いて来るように要求した。ところで次回にオットー中佐は契約書にサインを求めるから読んで見ると「貴官と戦史を研究するがドイツの秘密をあばく事をしない」と云うやうな事が書いてあつた。オットー中佐はその知人に「日本人は手強い」とこぼして居たそうである。

(『戦争史大観』、選集3—二四頁)

石原の質問の結果、フェルスター中佐は、その著『シュリーフェンと世界戦争』の改訂版を出し、弁明に努めねばならなかつた。石原は、「俊敏稲妻のやうな人」(荒木貞夫、大将、陸軍大臣)とか、「天才居士」(板垣征四郎、大将、満州事変時の上官)とか云はれたが、ドイツの参謀中佐を質問攻めにしてほと／＼困らしたとは、そのやうな評

価の裏付けにもなつてゐる。

オットー中佐の講義は、契約に従ふならば、十一月三日、六日、十日とつゞかなければならないのだが、もうその記述はない。おそらく十月二十九日の第七回目で終つたものと見える。

## 六 映画・サーカス・演劇

先に、石原は、「頭ヲ痛メ不眠」の友人を大いに慰めてやつたが(九月十九日)、北野大尉もまた「思郷病」に捕はれてゐた。「今日モ月ニ対シ散策中、切リニ家郷ノ物語」をした(十月二十九日)。「月ニ対シ散策」とは、二人ともなか／＼の風流。この場合も、石原が北野大尉を勉強に誘ひ、計画的に精進したため、大尉は「愉快ナ日ヲ送り得ル」やうになつた。

石原は、要所々々で、夫人への心遣ひも決して忘れない。

寒サ中々甚シク、少々風邪気味也。今日初メテ例ノ銚子君の心尽シノセルノ重ネタ着物ヲ着ル。大ニ温シ。白イ糸ヲトル丈ケデモ中々ノ手数ナリキ。縫フ時ノ心尽シ今更思ヒヤラル。針ガ通ラナイ為指ヲイタメタ事等思ヒ出ス。(十月十一日)

何といふ情の細やかさ。震災について、在独の同僚のもとには、家族からすぐに連絡が入つたのに、石原夫人だけは、いつまでもウンともスンとも云つて来ないのだが。しかし、石原は妻にだけ優しいのではない。兵に対しても、極めて優しくかつた。将校には大へん厳しく、聯隊長時代、その副官(佐官)を毎日のやうに衆人の面前でもお構ひな

して絞り上げた。それなのに、兵卒には、「兵隊さん」と呼びかけ、決して怒ることがなかった。

ここに聯隊長の時のエピソードを一つ挿入する。石原は馬に乗って勤務した。聯隊長の馬が聯隊本部の正門に着くと、喇叭手が合図の喇叭を吹く。石原は、「今日の喇叭は、大へんよかつた。褒賞休暇一日を付与する」と云ひ、それは軍隊手牒に記入される。ところで、兵は聯隊長から褒賞休暇を与へられても、それが実行されるかどうか、つまり、実際にこの兵に休暇が与へられるかどうかは、直属上官である中隊長の権限であり、現実には、ほとんど実行されなかつた。石原は、些細なことで兵に褒賞休暇を連発し過ぎたからである。

ベルリンに着いて半年がたち、ドイツ生活にも慣れて来たからか、十月に入ると、映画を見たり、サーカスや芝居見物に出掛けてゐる。

映画は前にもフリードリヒ大王やアメリカの排日ものを見たが、サーカスと芝居は初めてである。(もつとも、オペラはバリで経験済み。)この時の映画は、『ヴェニス商人』で、上出来だつたとある(十月十四日)。公園を散歩中、ポスターを見て、すぐに映画館に飛び込んだと云ふから、シェークスピアのこの作品には、前から興味をもつてゐたのであらう。サーカスは、しつかりした、大きな天幕の下で行はれたのだが、途中で雨漏りしてきて、傘をさしながらの見物となり、これも「愛嬌」と書いてゐる(十月二十一日)。入場料は二十億マルク(約三十銭)であつた。鵜外もドイツで三度サーカスを見てゐるが、こちらは雨漏りなどせず、道化が出て来て、「戯言百出、人の笑を博す」とあるが、入場料は一切書いてゐない。概して、『独逸日記』に金銭の記述は少ないのに対して、石原の手紙にそれが多いのは、歴史的なインフレの反映であらう。

それから数日後、石原はベルリンに来て、はじめて芝居見物に出掛けてゐる。出し物は、『赤裸々ノ世界』で、「歌劇ト、芝居ノ中間ノ如キモノ」である。その頃の資料で調べて見ると、『赤裸々ノ世界』とは、ジェームス・クライン (James Klein) の作・演出によるレヴュー (Aussatungsrevue) で、原題は „Die Welt ohne Schleiер“ と云ひ、ベルリンの「コミッシェ・オーパー」劇場で、一九二三(大正十二)年十月九日から翌二四年三月三十日まで上演された。「コミッシェ・オーパー」と云つても、ウンター・デン・リンデン通りにある、現在の劇場ではなく、先代の「コミッシェ・オーパー」で、場所も、線路 (の Bahn) を越えて、もつと北、シュプレー川沿ひであつた。

このレヴュー、わりに気に入つたらしく、詳しく感想を報告してゐる。

一種の風刺劇ト申スベク、華麗輕快ノ中ニ、現時ノ世界相ヲ演出シ、独乙民族ノ使命ヲオリ(織)出シタルモノラシ。芝居小屋ハ余リ大キナモノニアラズ、四五百人位ガ定員カト見ユ。毛唐式ニテ、濃厚ノ色彩、少々氣持悪シキモ、中々面白キ建物、且ツ舞台裝置ニ就キテ中々參考トスベキ所アルト見エラル。

最上等ノ入場料ヲ氣張ル。但シ帝劇等ト同ジク特等席ニテ見物ニハ却テ不都合ナリシ。入場料驚勿五百億馬克(日本円ノ二円足ラズ)。

七時半ヨリ十一時半迄十八幕ノモノナリ。中間ニ二十五分ノ一回休息アリシモノ、他ハ幕間トイフモノ一分以上ニ亘ルモノナク、中々氣持チヨク進捗ス。(十月二十五日)

まづ気づくのは、入場料の安さである。当時の帝劇の特等席は十五円（週刊朝日編『値段の風俗史』、朝日文庫）。現在でも、ドイツの入場料は、日本と比べて、はるかに安い、それにしても、約八倍となる。この差は、日独において、演劇がもつ日常生活での比重にもとづくであらう。次に、石原は東京でも帝劇に行つてをり、（しかも、夫人同伴だつたやうにも読めないでない）、パリやベルリンでも、寄席、オペラ、映画、サーカス、レヴューなどに出掛けてゐる。芸術家や学者なら、また別であるが、軍人なのに中々の芝居好きと云へる。石原は繰り返し、自分は芸術に疎い、と云つてゐる。しかし、これには額面通りに鵜呑みに出来ないところがある。一般には、石原は芸術・文学に関心を示さなかつたとなつてゐるが（例へば、山口昌男『挫折』の昭和史、二〇二頁）、さう単純に断定出来ず、むしろ、当時の軍人としては、それなりに芸術・文学にも興味をもつてゐたと思はれる。この手紙は次のやうにつゞく。

小生少々風流氣アラバ芝居デモ研究シ、国柱会ノ参考トナルベキ  
コトデモ送リタキモノナルモ、甚ダ残念也。（同右）

後の関東軍作戦参謀が、若き日に、演劇のメッカ・ベルリンで、もつと芝居に熱中したとしても、作戦に大幅な影響はなかつたであらうが、それにしても「甚ダ残念」である。

〔注〕

「東洋の諺に將の外にあるや君の命だに奉ぜざる所ありと云へり」

（明治十八年十月十四日）とあるが、正しくは、「將在軍君命有所不受」である。「独逸日記」はドイツで書いたまゝでなく、後年になつて、清書したものであるから、もし記憶が曖昧ならば、書物に當つて正しく引用することも出来たはずである。